



建築板金

ものづくりマイスター派遣先

大分県板金工業組合

〒877-0035 大分県日田市日高町 1456-3

概要 (H29.8 取材当時)

代表者——東雲 朝則

設立——1963年(昭和38年)任意発足

1968年(昭和43年)4月法人設立

組合員数——71名

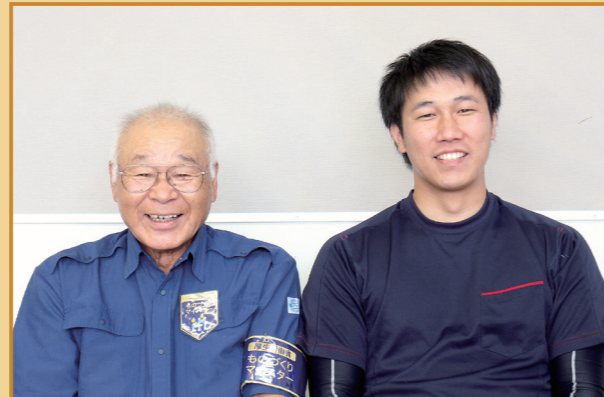


講習会場の大分職業訓練センター

どんな技能を求められても 即座に対応できる準備をしておく

大分県板金工業組合は、板金工業者の経営力強化や技能力の向上、さらには後継者の確保など幅広い活動を行っています。

こうした活動の一環として、組合員を対象とした講習会の実施も行っていますが、若い組合員たちの技能の幅をさらに広げていくために、「ものづくりマイスター制度」を活用し、通常の仕事では扱うことの少ない素材と課題をテーマに指導していただきました。



三浦マイスターと立川さん



作品

カリキュラム

	指導日	指導内容
1	H29 3/16	銅板の性質、加工の手順、加工作業 ・銅板の加熱温度、冷却の仕方 ・加工のやり方、打ち出し、押し出し、絞り
2	4/11	銅板加工作業 ・銅板打ち出し作業 ・酸洗い ・色付け(硫黄液での染め) ・仕上げ(額の取り付け)

期 間	平成29年3月~4月
実施場所	大分職業訓練センター
受講者数	15名

受入担当者の声 | 東雲 朝則 理事長

板金の世界は広い。だから、 身につけるべき技能の幅も限らない



ものづくりマイスターの講習をとおして 技能向上、後継者育成を支援する

大分県内に限らないと思いますが、板金の仕事をやっているうちの90%くらいは、家内工業といえますか、少人数の業者だと思います。そうすると、やはり、指導を受けるチャンスが少なくなってしまう、結果的には、後継者の育成が難しいという問題が起こってきます。また、技能者というものは、どんな業種でもそうでしょうが、自分の技能をもっと高めていきたいという意欲を持っています。

そういう組合員の要望もあり、講習会を実施していますが、その一環として「ものづくりマイスター制度」を活用しました。県全体に呼び掛けたところ約20人の応募があり、仕事の都合で参加できなくなる人もいましたが、15人が受講しました。

ふだん使うことのない技能でも 着実に訓練しておくことが重要

一口に建築板金といっても、屋根、雨樋、外壁、内壁だけではなくありません。神社仏閣の鬼瓦もあれば、工芸品のようなものまで多種多様にあります。扱う素材も、ステンレスやガルバ^{*}、それに銅板など用途に応じて様々です。通常の仕事では、ガルバを使った屋根仕事などがほとんどだと思いますが、必要な知識、用いる道具、扱う技能は、製作物や素材によって違ってきます。

講習のテーマは、この点を考慮して、ふだん馴染みのない銅板を使って、製作する機会の少ない翁の面に

取り組むことにしました。例えば銅板でお寺の屋根に鬼瓦をつけるという仕事があった時、すぐに対応できる技能を習得しておくことは、仕事人として当然の心構えだと考えたからです。

どの参加者も、日常の仕事で技能の下地が培われているので、飲み込みが早かったです。しわの多い翁の顔という、かなり複雑な形状をつくるのですが、道具を上手く使いこなしていました。こういう技能の深まりは、日常の仕事にも必ず生きてくるものです。

若い世代に板金の仕事を知ってもらい 板金の貴重な技能を伝承する

現場の第一線で働いている人たちを対象にした講習会には、手応えを感じました。仕事を持ちながらも15人の参加者がいたことは、「もっとやってみたい」「初心に帰って技能を追求したい」という意欲の表れだと思います。

技能に終わりはありません。技能の世界で生きる人たちが、もっと上を目指そうという気持ちを持ち続けているのですから、私たちもその思いに応えて、訓練を重ねるチャンスを提供していきたいと考えています。

最後に、ものづくりマイスターの話とは別ですが、私たちの組合では、県内の小学校を回って、子どもたちにレリーフづくりに取り組んでもらっています。たぶん、皆、板金という仕事については知らないと思いますが、やがて大きくなって、この仕事に関心を持ってもらいたいと願っています。後継者の育成とあわせて、後継者づくりも組合の大切な役割です。レリーフづくりに取り組んだ子どもたちが、未来のものづくりマイスターとなってくれば、こんな嬉しいことはありません。

^{*}ガルバ：ガルバリウム鋼板。アルミニウム、亜鉛、ケイ素の合金でメッキした鉄板。耐久性が優れている。



作品

ものづくりマイスター | 三浦 喜実雄

確かな技能の下地があってこそ、
自分の技能が築かれる

仕事はやる気と根気が重要

講習会では、まず私がやって見せて説明し、次に、受講者にやってもらいます。もちろん、うまく行かないところが出てきます。そこで質問が出れば、実際にやって見せながらアドバイスをします。技能を学ぶときの第一歩は、モノマネです。このモノマネがちゃんとできるようになったら、次の段階に進んで行くわけです。

仕事はやる気と根気です。受講者の立川さんもそうだと思いますが、板金の仕事に入った人は、まず、余った板金を集めてきては鉄の使い方を学んでいきます。それを何回も何回も繰り返していくうちに、鉄を使いこなし、板をきれいに切ることができるようになっていきます。これをしっかり身につければ、どんな鉄でも思い通りに扱えるようになります。ハンマーの叩き方もそうです。どこで力を入れると良いのか、それをわかって、そのとおりにできるようになるためには、ただ慣れるしかないのです。ここまで来て初めて、自分の技能をつくり出すことができるようになります。

技能指導のポイントは、
一人ひとりの人間の特徴を見抜くこと

難しいのは、この「自分の技能」ですね。

当然ですが、人にはそれぞれの特性があります。私たちの世界では、「手が違う」といいますが、得手不得手、技術力などは様々です。当然他人がやったとおりににはできません。そのため、それぞれの人に合った教え方が必要になってきます。

講習会のなかだけでなく仕事現場の指導でも同じことですが、指導する側として心掛けるのは、一人ひとりの技量や癖、特性といったものを見抜くことです。この人はこんな癖を持っているなどしっかり見抜き、その癖を踏まえた指導をしてあげることが大切になります。技能を指導するうえでは、要領というか、コツを的確に教えることも肝心です。その場合でも、その人の個性を見抜いたうえでないと、有益なアドバイスにはなりません。

時代の変化に対応できる
技能を身につける

今回の講習で感じたことは、若い人の伸びは早いということでした。やはり、日ごろの仕事で培った技能の下地があるからだと思います。頼もしいですね。私たちも、先輩から受け継いだ技能を確実に次の世代に引き継ぐため、こうした講習会を活用するつもりです。

板金の世界は実に幅の広いものですが、一方では、時間の流れとともに変化もしています。家屋などに用いる素材は、昔はブリキ板でしたが、今では亜鉛メッキ鋼板、ガルバリウム鋼板、ステンレスなどが主流になっています。また、屋根や雨樋、外壁といっても、建築工法が変化すれば、それに対応した技能が求められます。

技能を引き継ぐとは、こうした変化を正面から受け止める力を養うことのような気がします。そのためには、技能の基本をしっかりと身につけ、その下地のうえに自分の技能を確立していくことが必要です。この点は、いつの時代でも変わりはありません。

ものづくりマイスターの役割の重要性は、ここにあると思います。



作業風景

ものづくりマイスター
三浦 喜実雄 (みうら きみお)

昭和19年(1944年)生まれ
昭和45年度 1級技能士 建築板金(内外装板金作業・ダクト板金作業)取得
平成元年度 1級技能士 冷凍空調調和機器施工
(冷凍空調調和機器施工作業)取得
平成2年度 1級技能士 配管(建築配管作業)取得
平成26年度 厚生労働省ものづくりマイスター
(建築板金、配管、冷凍空調調和機器施工)認定

受講者の声

ふだんでは馴染みのない仕事を依頼されたときに
備え、様々な技能を身につけたい

立川 隼也さん

板金の世界に触れて楽しいと感じたことが
今につながっている

板金の世界に入ったのは、19歳の時でした。父が板金の仕事をやっていて、手伝えと言われたのがきっかけです。実際にやってみると、楽しかったです。それから、この仕事に興味がわいてきました。しかし、手伝えと言った父は、別に教えてくれるわけではありませんでした。ただ、「見て覚えろ」という態度でした。父がやってみせる。それを真似してやってみる。これの繰り返しです。今でも変わらないですね。

はじめの頃は、ひたすら鉄で板を切る練習を繰り返しました。半年間、毎日30分から1時間くらい切り続けました。鉄で切ることはできますが、切り口をきれいに切ることができるようになるには、やはりそのための技能が必要です。練習を重ねているうちに、次第に切り口がきれいになっていきました。最初に手伝ったときに楽しいと感じたからこそ、同じ練習を毎日繰り返せたのだと思います。

道具を扱うときの感覚を知るために
訓練を重ねる

ふだんの仕事は、ガルバを使っての屋根、樋、雨切りがほとんどです。

今回の三浦マイスターの講習会でのテーマは、銅板を使って顔をつくり出すというものでした。使ったことのない銅板で複雑な形を打ち出すのは、確かに難しい作

業でした。叩き方を間違えると、板にしわが寄ってしまいますし、下手をすると銅板に穴があいてしまうのです。破らないように頑張って何とか課題を完成させました。

作る目的や材料が違えば、それに応じて道具も手法も異なります。ふだん使ったことのない道具を使ったり、ハンマーの叩き方も変えたり、慣れないことの連続でしたが、ポイントのところで三浦マイスターからの確かなアドバイスをいただき、新しい技能が開かれてくるのを実感しました。また、これまで自分の仕事では気づかなかった癖の指摘も受けました。どんな仕事もそうなのかもしれませんが、道具の持ち方や力の入れ具合などは、すべて感覚の問題にたどり着くように思います。この感覚は、実際に手を動かし、音を聞き、目で見てみないとわからないものです。本当に参加して良かったです。

仕事の幅に応じて
技能の幅も広げていきたい

こうした講習会があれば、また参加したいと思います。板金の仕事は幅の広いものですが、神社仏閣の仕事などに携わる機会はそれほど多くはありません。でも、そういう仕事を頼まれた時のために、それをこなすことのできる技能を日頃から培っておく必要があります。

先輩たちの優れた技を受け継ぎ、幅広い仕事を高いレベルで上げることができるように、これからも精進したいと考えています。何といても、自分で楽しいと感じて進んできた世界なのですから。

地域技能振興コーナー担当者より

大分県技能振興コーナー
コーナー長 高倉 信二

コーディネーター
辻本 秀行

「ものづくりマイスター制度」には、数多くの職種がありますが、技能士の数が少なく、熟練の技能を継承することが難しい職種もあります。二極化ですね。建設業界もそうした悩みを抱えており、このままでは、重要な技能の伝承が難しくなる恐れがあります。簡単な解決策はありませんが、「ものづくりマイスター制度」は

子どもたちに仕事の魅力を伝え、若者に技能の奥深さを教える大切な取り組みです。私たちは、誇りを持って技能を伝承しようというマイスターを積極的に派遣していきたいと考えています。